（様式１）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	ユマニチュード®の「触れる」技術における上肢の使い方の特徴		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	看護学部　看護学科	准教授	林　静子
	富山県立中央病院	看護師	矢野　正晃

研究結果の概要

【目的】

本学は世界に先駆けて看護基礎教育にユマニチュード®の考え方を取り入れ、4 年間通してカリキュラムに位置付けている。ユマニチュード®では、患者の身体に「触れる」動作の特徴として「広く」「柔らかく」「ゆっくり」「なでるように」「包み込むように」があり、特徴をふまえて講義・演習を行っている。しかし、初学者である看護学生は指先に力が入り患者の身体をつかむように触れ、教員から指摘されるまで気づかず、無意識に行動している場合が多い。そこで本研究では、自分自身の体位変換実施の状況を客観的かつ俯瞰的に観察できるように多方向から撮影し、その映像を同時に視聴することがマニチュード®の「触れる」技術の自己評価に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

ユマニチュード®の「触れる」技術を学修した看護学部学生 8 名を対象に、2023 年 3 月に実験を行った。

実験内容は、対象者が模擬患者に対し仰臥位から側臥位への体位変換を行い、その様子をビデオカメラ 4 台で a.患者の頭側、b.患者の足側、c.看護者の正面、d.上方の 4 方向から撮影した。撮影した映像（以下、映像）を 4 分割画面で同時に視聴をした。

体位変換実施直後と映像視聴後に、自分自身の実施内容を振り返り自己評価の回答を得た。評価内容は、ユマニチュード®の「触れる」技術視点に沿って 7 項目を提示し、できている・ややできている・あまりできていない・全くできていない］の 4 段階で評価を行った。さらに、評価の判断理由について自由記述を求めた。

【倫理的配慮】

富山県立大学「人を対象とする研究」倫理審査部会の承認を得た。

【結果・考察】

体位変換直後と体位変換実施映像視聴後の評価点数を比較した結果、1 つの項目のみに有意差があった。その他の項目では、評価の変化はあったが変化の方向性は様々であった。評価の判断理由の記載では、体位変換実施直後は感覚的な判断理由であったが、映像視聴後は具体的な評価が記述されていた。

今後の展開

予定した対象人数 20 名に満たないため、今後は調査期間を延長し対象者を増やし、多方向撮影映像の同時視聴による教育的効果の検討を行う。

また、本研究の結果の詳細は看護系学会にて成果を発表する予定である。